

## 第3章

# 欧州に対するロシアの戦略的アプローチ

カロリナ・ベンディル・パリン

ロシアと欧州との関係には、二面性と両義性の要素が少なからずある。ロシア国民の多くは、自分たちは欧州の一員だと言いながら、ロシア独自の「ユーラシア人としてのアイデンティティ」も強調する傾向がある。ロシア国土の大半はアジア部に含まれる一方、人口の大部分はウラル以西の欧州部に住む。ロシアに対して何かと助言をし、時には厳しい批判を浴びせる西側の姿勢は歓迎されないが、ロシアが海外に直接投資と技術移転を求めるときに、まず頼りにするのが欧州である。ロシアのエリート層は子弟を欧州の寄宿学校に留学させ、英国の高級マンションや邸宅を購入する。その一方で、国家安全保障関連の演説や文書には反西側のレトリックが溢れている。

この逆説を理解するには、第一に、ロシアの全体的な戦略における欧州と西側の役割を理解することが重要である。第二に、ロシアは西側の軍事的脅威という観念を捨てておらず、ロシアが策定する欧州方面の軍事戦略を見れば、この方面にどのような種類の敵を想定しているのか推察することができる。第三に、とりわけ激動の選挙シーズン（2011～12年）を終えたこの時期、国内政治におけるロシアの内政上のレトリックの動きは、国際的にどのように波紋を及ぼし得るかを理解する鍵となる。

### 3.1 ロシアの全体的な戦略における欧州の位置づけ

ロシアの「対外政策概念」は、グルジア戦争の直前、かつ2008年秋にロシアを襲った経済危機に先立つ同年7月に採択された。そこには、国際舞台におけるロシアの重要性が増大するなどの新たな展開により、旧「概念」（2000年に採択）を改訂することになったと記されている。また、この「概念」には、外交政策の中心的な目標が列挙されている。第一は、「現代世界における影響力の中心の一つ」として、国際社会においてロシアの権威を確保することである。第二に、ロシアの外交政策は

「ロシア（経済）の近代化に有利な外的条件を創出」すべきとしている<sup>1</sup>。この文書には、ロシアの全体的な戦略の主な原則だけでなく、それが内包する緊張も如実に表れている。世界におけるロシアの位置づけと大国としての地位の強化が最優先ではあるが、この目標が、自らが遅れをとらないように（経済の）近代化を進められるかどうかにかかっているという認識もみられる。この二つの目標間の緊張は、欧露関係に特に顕著に表れていると言えよう。

世界の大国としての立場を強化する取り組みに関しては、米国との関係が最重要である。ロシアは米国と対等に処遇されることを望んでおり、これが不可能となれば、友人として無視されるくらいなら、敵として注目されたほうがいいと思っている<sup>2</sup>。ロシアと欧州の関係は、多くの面で、米国との相対的な位相の延長線である。ロシアは時として、欧州を米国の忠実な従属国である西側の一部として扱うが、米国との関係の悪化を補てんするために欧州との特別な関係を助長しようとするケースも多い。つまり、米国に対するモスクワの先入観を念頭に置かずして、欧州に対するロシアの戦略的アプローチを分析することは不可能である。ロシアは、とりわけ米露双方とも譲歩の姿勢を見せずに物議をかもしているミサイル防衛問題を理由に、米国との一時的な関係悪化に備えているようである<sup>3</sup>。米国が断固として計画を進めようとするなら、欧州のミサイル防衛施設がロシアの核戦力に向けられることはないという絶対的な保証が必要であり、その保証は「客観的な軍事技術基準」に基づくものでなければならぬとロシアは主張する<sup>4</sup>。このことは、第一に欧州連合（EU）および北大西洋条約機構（NATO）といった多国間関係に、そして二国間関係においても、欧州とロシアの関係に影響を及ぼさざるを得ない。欧州諸国の中でもドイツ、フランス、イタリアは、依然としてロシア自らが求めるパートナーである。

さらに、ロシアは独立国家共同体（CIS）との関係にも優先順位を置いており、多くの CIS 諸国においてその立場を強めることに成功している。ウクライナとの関係は改善し、2010年1月にはベラルーシ、カザフスタンとの間で関税同盟を発足させた。また、モスクワは集団安全保障条約機構（CSTO）の枠内での協力も強化している<sup>5</sup>。ここでも、CISにおけるロシアの影響力増大と、一部の CIS 諸国に存在する EU、NATO、ロシアの三者間の影響力競争を無視して、欧露関係を分析することは困難である。ロシアは、自分たちには「この地域の監督権」があると思っている<sup>6</sup>。

したがって、今後もこの地域における立場を守り続けるであろうし、こうした EU との競争がやがてなくなると考えるのは早計であろう。

それと同時に、ロシアは EU 全体および個々の EU 加盟国からの投資と技術移転の誘致に熱心である。ロシアの世界貿易機関 (WTO) 加盟に伴い、貿易関係発展の見通しが高まっている。また、現行のロシア・EU パートナーシップ協力協定 (PCA) に代わる新合意の交渉に向けた基盤も強化された。PCA は、当初は発効から 10 年後の 2007 年に失効することになっていた。新たな合意に向けた交渉は難航しているものの、PCA はどちらかの側が破棄しない限り、自動的に 1 年ずつ延長される。PCA の主文はロシアと EU の経済関係を規定しているが、ロシアの WTO 加盟により、ロシアと EU 加盟国すべてに同じ規制と制裁メカニズムが適用されることになるため、かつて PCA で規定されていた多くの問題が解決されることになる。言い換えれば、一層深化した新合意に至る見通しが明るくなったわけである。また、WTO 加盟プロセス促進のため、ロシア・EU 間で対話を重ねてきたことにより、互いに相手に対する認識が深まったと考えられ、これは今後の関係にとってよい兆候となり得る。2008 年に始まったこの交渉プロセスには、新たな弾みが大いに求められるところである。

EU・ロシア間では年 2 回の首脳会議開催も決められており、EU ほど綿密な正式の相互枠組みを有する第三者は他にない。PCA と近代化パートナーシップのほかに、EU とロシアは、経済問題、自由・治安・司法、対外・安全保障、研究・教育・文化の 4 つの「共通空間」と、それぞれに対応するロードマップを採択している。関係活性化のためのイニシアティブにも不足はない。首脳会議と連動した人権対話や、地域協力プロジェクトなどの包括的ネットワークもある。しかし、このような現状にもかかわらず、EU・ロシア関係の進展は遅い。ロシアは EU との間で「近代化のためのパートナーシップ」に関する合意を結んだ<sup>7</sup>。さらにこのブリュッセルとの包括的合意の後、2011 年 12 月までに EU 加盟国 23 カ国との間で個別の近代化パートナーシップの交渉を行ってきた。しかし、課題となっているのは、こうしたパートナーシップの実際の内容を充実させることであり、大部分は「多国間および二国間の声明の範囲を超える」ところまで及んでいない<sup>8</sup>。これは、EU・ロシア関係のほとんどの側面に広がっている問題である。

モスクワにとって、EU は何よりもまず貿易パートナーであり、認めるべき大きな経

済主体である。EU はロシアにとって最重要のエネルギー輸出先であり、海外直接投資と技術移転の提供元でもある。ロシアの対欧州政策は、おそらく今後も二方面に分かれた形が続くだろう。一方では、貿易やその他の交流を促進するため、良好な関係を維持しようとする政策を継続する。そして他方では、欧州への依存を弱めるため、エネルギー輸出の多角化の試みも続けるのである。さらに、CIS 内での影響力ある立場も守り続けるだろう。

国際舞台で EU が担う安全保障政策上の役割には、ロシアはさほど関心を寄せていない。ロシアは、国際安全保障の諸問題に関して、まず米国と NATO、そしてドイツ、フランスとの二国間関係に目を向ける傾向がある。2008 年 6 月に、メドヴェージェフ大統領（当時）が新たな欧州の安全保障構造に関する提言を最初にベルリンで表明したのはこの理由によると考えられる。

メドヴェージェフ提案に対する欧州の反応は、よく言えば丁重であるが、はっきりしないものであった。不賛同の根幹にあったのは、安全保障に対する見方の根本的な相違である。ロシアがハード・セキュリティの構築に集中したいと考えているのに対し、EU とその加盟国は、ヘルシンキ条約で確立された、ソフトとハードの両面が強く結合した安全保障を保持したいと望んでいる。欧州はロシアの提案をあからさまに拒否せずに済むように、欧州安全保障協力機構（OSCE）の枠内の、いわゆる「コルフ・プロセス」を通じて対応した。ロシアはこの対応への不満を隠さず、コルフ・プロセスは独立したプロセスとみなすべきで、メドヴェージェフ提案に関する交渉の推進とは別だと主張した。2009 年 12 月には、ロシア大統領府のウェブサイト上で「欧州安全保障条約」の草案まで公開した。欧州の新たな安全保障体制についてのロシアの構想は、紛れもなく 19 世紀の大国間協調を想起させるものだった。この種の安全保障構造に合意するなど、ブリュッセルには考えられないことだろう。このような枠組みは、共通の価値観により多種多様な欧州諸国の参加を結びつけている EU において、その内的一体性を損なうおそれがあるだけではない。ブリュッセルにとってのソフト・セキュリティとは、ウクライナやモルドバなど、人権や法の支配、経済的自由といった価値観がまだ訴求力を持つ国における安定（ハード）通貨となるのである。

## 3.2 西部方面におけるロシアの軍事戦略

ロシアは、ソフト・セキュリティの点で欧州と張り合うのは難しいとも思っているが、モスクワにとってそれよりはるかに不安なのは、通常戦力面の軍事安全保障において西側より遅れているという点である。これは、ロシアが2008年に連邦軍の通常戦力の改革を行った主な理由の一つであった。グルジア戦争は軍事的勝利に終わったものの、トビリシのグルジア政府が直前に西側から調達した装備と比べて、ロシア側の装備が劣っているのは明らかだった。さらに、ロシア軍は必要部隊の迅速な展開に弱いことや、既存の指揮統制システムでは共同作戦が不可能とは言わないまでも、実際には困難であることもわかった。グルジア戦争の場合、ロシアにはグルジアとの国境沿いに臨戦態勢の部隊を配備していたという強みがあった。また、直近に実施した大規模演習と類似したシナリオで実際の戦争が展開されたという幸運もあった<sup>9</sup>。

それにもかかわらず、モスクワはこの戦争の多くの面に満足が行かず、2008年10月、ロシア国防省は連邦軍を抜本的に変革する軍改革の取り組みを開始した。重点が置かれたのは、調達（国防省の計画によれば、2020年までに武器装備の70%を「近代化」することになっている）と、紛争地域へ迅速に展開できる即応性の高い部隊の創設である。

モスクワが他のどこよりも優先する戦略方面を、一つだけ挙げることはできないであろう。連邦軍の指揮系統が西部、東部、南部、中央の4つの戦略方面に再編され、軍組織がそれに対応する4つの軍管区に分割されたのは、おそらく各方面に想定される敵対者の種類の違いと、それによる連邦軍の任務の違いに部分的には起因すると考えられる。ロシア軍の司令官らは、西部方面では技術的に高度化した敵対者、南部方面では対ゲリラ戦、東部方面では「百万の軍」を想定していると発言している。むしろ、これは極端に単純化された言い方であって、慎重を期して分析すべきではあるが、今後のロシアの軍編成に関する議論の出発点にすることはできる。

2008年から2011年のロシアの実動戦略演習を分析すれば、ロシアは一つの戦略方面だけを特に優先しているわけではないという仮説と、軍隊の主要任務は方面ごとにそれぞれ異なると考えているという仮説が共に立証される。各演習間には大きな類似性が見られることから、ロシアは若干の変更のみで異なる方面に等しく展開できる

旅団を編成しようとしていることが伺える。加えて、ロシアは動員能力を相当減らしていることから、戦略的機動力がきわめて重要になる。

ロシアがこの改革プロセスと並行して、軍事戦略策定への集中的な取り組みを始めているのではないかと推測する根拠が十分にある。2011年3月の時点でも、参謀総長であるニコライ・マカロフ上級大將はロシア軍事科学アカデミーの年次会合で、ロシアの軍事思想は20年遅れていると発言した<sup>10</sup>。その後、同年4月に国防省は、省付属の科学技術政策会議を設置したと発表し、アンドレイ・ココーシン（元安全保障会議書記）が議長に任命された<sup>11</sup>。この会議は次のような任務を負っている。

……科学技術の最新の知見を用いながら、将来の連邦軍活用の形態と手段の概念的基盤の発展を支援し、効率性、武器の質、軍事・特殊技術に関して連邦軍に課される要求事項を決定するための提言を立案する<sup>12</sup>。

すなわち、ロシアはおそらく、西部方面の将来戦略の詳細と、たとえばネットワーク中心のソリューションや高性能兵器、無人偵察機などを用いた戦争を遂行するための概念を、現在もなお発展させつつある<sup>13</sup>。こうした概念がすべての戦略方面で用いられるだろうことは疑いないが、おそらく最初は西部軍管区において開発され、同軍管区の演習で訓練が行われるものとみられる。

さらに、ロシアの西部方面の軍事戦略は、短期から中期的な将来においても、引き続き、核戦力に依存すると考えられる<sup>14</sup>。マカロフ参謀総長は2012年2月のモスクワでの記者会見で、主な重点は戦略核兵器に置かれると強調した。2012年に国防予算の一部が強制的に削減されるとしても、戦略核兵器に用途が指定された予算が削減の憂き目に会うことはないだろう<sup>15</sup>。核攻撃への対応能力保持に対するロシアの決意は固い。

### 3.3 ロシアの国内政治と西側

ロシアの国民アイデンティティは、依然としてその大国としての地位に密接に関連している。2012年1月にロシアの調査機関レヴァダ・センターが実施した世論調査では、



回答者の57%が大統領選で投票する候補者に期待する最も重要なことは「尊敬される大国としての地位回復」と答えている。この項目の回答率は、「法秩序の強化」(52%)や「一般大衆のための公平な資産配分」(49%)を上回った<sup>16</sup>。この事実を無視して政策綱領を描くことのできるロシアの政治家は、ほとんどいないだろう。プーチンの訴求力と高い支持率の主な理由の一つは、ロシアに国の誇りを取り戻させたという評価を獲得していることである。

2011年12月の議会下院選挙と2012年3月の大統領選挙は、ロシアの外交政策に影響を及ぼした。大統領選を前に政策綱領を略述した一連の論文のうち、プーチンは、2本を安全保障政策に、国防と外交政策にそれぞれ1本ずつを充てている。外交政策を取り上げた論文では、ロシアを「拡大欧州、より広範な欧州文明」の一部とみなす必要性を強調しているが、同時に東欧(特にエストニアとラトビア)のロシア語を話す住民の権利保護の必要性についても言及している。プーチンは、ユーロ危機がロシアに影響する可能性を認め、「強い欧州」はロシアの利益になると述べている。そのうえで、「リスボンからウラジオストクに至る調和的な経済共同体(soobshchestvo)」の構築による経済の深化を構想する。また、欧州とのより緊密なエネルギー協力を提案しながら、EUの第3次電力・ガス市場法令が関係強化につながることは否定し、このEUのイニシアティブはむしろロシアのエネルギー企業に圧力をかけることを意図したものだとの見解を示している。全般として、プーチンの外交政策は協力を歓迎しているが、そこには常に、ロシアは強くあり、独自の政策を実施できなければならないという警告が伴っている。

ロシアは強くあり、しっかりと自らの足で立っているときのみ、敬意をもって扱われ、高く評価される。ロシアはこれまでもほぼ常に、独自の外交政策を実施する特権を有していた。そして今後もそうあり続けるであろう。また、世界の安全保障はロシアと共にあるのみ守ることができるのであり、ロシアを「脇へ追いやり」、その地政学的立場を弱め、防衛力を損なおうとする試みによっては守れないと私は確信している<sup>17</sup>。

シリアと米国のミサイル防衛計画に関するプーチンのレトリックは、選挙期間中も融

和路線とは程遠いものであり、米国に対しては最大限の批判が浴びせられた。批判的となったのは、新しくマイケル・マクフォール大使が着任したばかりのアメリカ大使館で、プーチンの大統領再選を支持する団体によるデモが組織された。ロシアのテレビでも、マクフォールは対立候補に支援と資金を提供し、ロシア政府の転覆を画策したとして非難された。モスクワでプーチン支持派と反対派が同日に競い合うようにデモを敢行するなど、選挙運動が過熱するなかで、この選挙は「オレンジ革命」によってロシアを破滅させようとする西側の試みと、安定の保証人としてのプーチンのどちらを選ぶかの争いとも表現された<sup>18</sup>。

2012年3月の大統領選挙が終わると、モスクワの国内政治活動はいくらか熱が冷めたようである。しかし、ロシアの戦略研究センター（CSR）が2011年に発表した2件の調査によれば、ロシアの政治危機の高まりを示す明白な証拠がある。同センターの分析では、ロシア社会内部で増大しつつある対立の潜在性は、増大するロシア中間層の台頭と密接に関連している<sup>19</sup>。2000年以降の強力な経済成長の結果、中間層の増加と繁栄が可能になった。2008年の経済危機の前には、中間層は成年人口の約3分の1、経済活動人口の40%、都心部人口の約半数（特に顕著なのはモスクワ）を占めていたと推定されている<sup>20</sup>。

政治参加に積極的な大勢の中間層が住むモスクワは、瞬く間にロシア野党の活動の中心地になり、野党は2011年後半から大規模な抗議活動を組織した。とはいえ、2012年春の野党の要求には体制変動や革命は含まれておらず、漸進的な改革、公正な選挙、法の支配に重点が置かれていた。つまり、クレムリン指導部の即時の交替は可能性のある帰結とはとはみなされておらず、一致団結して現実的に与党に取って代わる真の野党勢力は、2012年春の時点では存在しなかった。特に、国内の野党勢力がプーチンの外交政策に異議を唱えなかったことは強調しておくに値する。外交分野には「無関心」であるようにすら見え、外交政策よりも、プーチンが3期にわたり大統領職に就くことの違法性をめぐる主張に終始した。実際のところ、異種混合的な野党勢力の間では、ロシアの外交政策の今後の方向性に関する総意が根本的に欠けているのではないかと疑わざるを得ない<sup>21</sup>。

そうは言っても、クレムリンは、野党と中間層からの要求の少なくとも一部を満たすという難題に向き合うことになる。野党と中間層は、今後もロシアの政治システムの中



でより強大な役割を要求し続けるだろう。ロシアが経済と諸制度の近代化に成功するとすれば、中間層がその鍵となる。補助金への依存や強力な指導者といった概念ではなく、法の支配や政治的・経済的自由など、こうした中間層が信奉する価値観は、たとえば欧州連合などの中核的な価値観の方に近い<sup>22</sup>。これらの価値観がロシアの社会、経済、政界でより広く受け入れられれば、長期的に見て、今後ロシアと欧州の間でより深く強靱な関係を築くための吉兆となり得る。

ロシアの政治指導層は、大幅な改革を実行するとともに、プーチンの主要な支持団体と側近を満足させながら、中間層の役割を捻出するという途方もない難題に直面している。プーチン支持の有権者は依然として人口の過半数を占めており、以前の調査では政治的自由や法の支配よりも補助金の継続を望んでいた<sup>23</sup>。しかしながら、CSR が 2012 年 5 月に発表した追加調査によれば、こうした有権者もしいにプーチンの諸政策や、腐敗の蔓延、法の支配の欠如に幻滅しつつある。何より重要なのは、住宅、医療、教育を始めとする様々な政策分野で目に見える改善成果をもたらすことができない現在の政治指導層の能力を、こうした有権者らが信用していない点である<sup>24</sup>。

### 3.4 欧州に対するロシアのアプローチ：不可能を可能にする試み

ロシアが外交政策を組み立てるうえで、米国が常に決定要因の一つとなるのは疑いないが、ワシントンとの間に起こり得る問題を相殺するために、モスクワが欧州に目を向ける理由は十分にある。とりわけ貿易関係や、海外直接投資や技術移転誘致の話となれば、欧州はロシアにとってきわめて重要なパートナーである。ロシアの WTO 加盟は、協力促進の重要な要因になるだろう。また、欧州はロシアの主要貿易相手国という立場にあることから、モスクワにとっては、引き続き、独自の外交政策を実施するというロシアの立場を常に主張しながらも、良好な関係を維持することが重要になってくる。

ロシアの西部方面における軍事戦略は、想定される NATO からの軍事的脅威に向けられていると思われる。このことは、「軍事ドクトリン」などの軍事戦略文書からも、

西部軍管区における軍事演習からも明白である。ロシアはかつての大量動員軍から、変化し続ける軍事的脅威に迅速に対応できる軍隊へと移行しつつある。また、新たな戦争様式と新しい技術の統合にも重点が置かれている。さらに、西部戦略方面における通常戦力の劣性を克服しようという決意も垣間見える。したがって、多くの面で、今後もロシアは日和見的な態度で、欧州をパートナーであり、潜在的な敵とみなし続けるであろう。

2011年、ロシアの政治指導層は、何年かぶりに国内政治の場で難題に直面することになった。しかしながら、野党がプーチンの外交政策に対して代案を示すことはなかった。こうしたプーチンの政策は、国民の間で強い支持を得ているようである。また、大統領選挙期間中には、悪意に満ちた反西側レトリックがたびたび用いられた。これに加えて、ロシアのアナリストらは、今後数年間は米国との関係が難しくなると予想していることから、ロシアの西側との関係が近い将来に抜本的に改善するとは考えにくい。ロシアは引き続き、レトリックでは協力を歓迎しながらも、国際問題における強大な役割を要求し、CIS内での影響力を保持していくものとみられる。

さらに、ロシアが欧州と価値観を共有する共同体に積極的に参加することもないと思われる。しかし、長期的な視点に立てば、増大を続ける中間層が影響力の拡大を求めていることが、西側および欧州との関係強化の吉兆となり得る。かといって、この台頭しつつある中間層が、揃って西側に対し全面的に肯定的な見方をとると短絡的に決めてかかるべきではない。とはいえ、こうした中間層が受け入れている価値観の多くは、長期的に見れば関係促進につながる可能性がある。このような展開が、継続する反西側のレトリックとどううまく共存していくかについては、今後の動きを注視することになる。

---

<sup>1</sup> Ministry of Foreign Affairs of the Russian Federation (2008) 'Kontseptsiia vneshnei politiki Rossiiskoi Federatsii' [Foreign Policy Concept of the Russian Federation], *Ministerstvo inostrannykh del*, on the Internet: <http://www.mid.ru/bdcomp/ns-osndoc.nsf/e2f289bea62097f9c325787a0034c255/d48737161a0bc944c32574870048d8f7?OpenDocument> (retrieved 22 February 2012).

<sup>2</sup> Tsyppkin, Mikhail (2009) 'Russian Politics, Policy-Making and American Missile Defence,' *International Affairs*, Vol. 85, No. 4, pp. 781–799, p. 793.

- <sup>3</sup> 一例として、2011年の世界経済国際関係研究所(IMEMO)による2012年予測を参照。Dynkin, Aleksandr and Baranovskii, Vladimir, eds (2011) *Rossia i mir: 2012* [Russia and the World: 2012] (Moscow, IMEMO RAN), pp. 84–7.
- <sup>4</sup> Lavrov, Sergei (2012) ‘Vystuplenie Ministra inostrannykh del Rossii S. V. Lavrova v Gosudarstvennoi Dume Federalnogo Sobraniia Rossiiskoi Federatsii v ramkakh “Pravitelstvennogo chasa,” Moskva 14 marta 2012 goda’ [Speech by Minister of Foreign Affairs S. V. Lavrov in the State Duma of the Federal Assembly of the Russian Federation during ‘Government hour’], *Ministry of Foreign Affairs*, 14 March 2012, on the Internet: [http://www.mid.ru/brp\\_4.nsf/0/4EEBE0654009296A442579C100488E87](http://www.mid.ru/brp_4.nsf/0/4EEBE0654009296A442579C100488E87) (retrieved 15 March 2012). 大統領選挙前の外交政策に関するプーチンの論文も参照。Putin, Vladimir (2012) ‘Rossia i meniaiushchiisa mir’ [Russia and the Changing World], *Moskovskie novosti*, 27 February 2012, on the Internet: <http://mn.ru/politics/20120227/312306749.html> (retrieved 15 March 2012).
- <sup>5</sup> Hedenskog, Jakob (2012) ‘Utrikespolitik’ [Foreign Policy], in Vendil Pallin, Carolina (ed.) *Rysk militär förmåga i ett tioårsperspektiv—2011* [Russian Military Capability in a Ten-Year Perspective—2011], March 2012, FOI Report, FOI-R--3404--SE (Stockholm, FOI), pp. 57–74.
- <sup>6</sup> Moshes, Arkady (2012) ‘Russia’s European Policy under Medvedev: How sustainable is a new compromise?’, *International Affairs*, Vol. 88, No. 1, pp. 17–30, p. 30.
- <sup>7</sup> Hedenskog (2012) op cit., p. 62.
- <sup>8</sup> Moshes (2012) ‘Russia’s European Policy under Medvedev,’ p. 20.
- <sup>9</sup> Vendil Pallin, Carolina and Westerlund, Fredrik (2009) ‘Russia’s War in Georgia: Lessons and consequences,’ *Small Wars & Insurgencies*, Vol. 20, No. 2, pp. 400–424.
- <sup>10</sup> Litovkin, Viktor (2011) ‘Nachalnik Genshtaba postavil diagnoz’ [The Chief of the General Staff Delivered the Diagnosis], *Nezavisimoe voennoe obozrenie*, No. 12 (1–7 April 2011), p. 5. また、プーチンの連邦軍に関する選挙前論文も参照。Putin, Vladimir (2012) ‘Byt silnymi: garantii natsionaloi bezopasnosti dlia Rossii’ [To Be Strong: A Guarantee for Russia’s National Security], *Rossiiskaia gazeta*, 20 February 2012, on the Internet: <http://www.rg.ru/2012/02/20/putin-armiya.html> (retrieved 20 February 2012).
- <sup>11</sup> Litovkin, Viktor (2011) ‘Andrei Kokoshin: “My budem dumat o budushchem”’ [Andrei Kokoshin: We will think about the future], *Nezavisimaia gazeta*, 20 May 2011, on the Internet: [http://www.ng.ru/realty/2011-05-20/1\\_kokoshin.html](http://www.ng.ru/realty/2011-05-20/1_kokoshin.html) (retrieved 21 March 2012).
- <sup>12</sup> ‘Pri Minoborony RF sozdan Sovet po nauchnoi i tekhnicheskoi politike’ [A Council on Scientific and Technological Policy Attached to the MoD of the Russian Federation Has Been Created], *Rossiiskaia gazeta*, 21 April 2011, on the Internet: <http://www.rg.ru/2011/04/21/minoboroni-sovet-anons.html> (retrieved 22 February 2012).
- <sup>13</sup> McDermott, Roger (2011) ‘Network-Centric Warfare as the Undeclared Aim of Russian Defense Reform: Russian perspectives and challenges,’ in McDermott, Roger, Nygren, Bertil and Vendil Pallin, Carolina (eds) *The Russian Armed Forces in Transition: Economic, geopolitical and institutional uncertainties*, pp. 49–69. 軍事思想の様々な潮流については、Bukkvoll, Tor (2011) ‘Iron Cannot Fight—The Role of Technology in Current Russian Military Theory,’ *The Journal of Strategic Studies*, Vol. 34, No. 5, pp. 681–706 を参照。また、ロシア軍事科学アカデミーと連邦軍司令部との共同会議でのマカロフの演説も参照。Makarov, Nikolai (2012) ‘Reforma daet nuzhnye rezultaty’ [The Reform Is Producing the Necessary Results], *Nezavisimoe voennoe obozrenie*, No. 5 (17–23 February 2012), pp. 1, and 3.
- <sup>14</sup> Westerlund, Fredrik (2012) *Rysk kärnvapendoktrin 2010: utformning och drivkrafter* [Russian

Nuclear Doctrine 2010: formulation and driving forces], FOI Report, FOI-R--3397--SE, January 2012.

- <sup>15</sup> Litovkin, Viktor (2012) 'Genshtab delaet stavku na strategicheskie sily' [The General Staff Puts Emphasis on the Strategic Forces], *Nezavisimoe voennoe obozrenie*, 15 February 2012, on the Internet: [http://nvo.ng.ru/reality/2012-03-16/1\\_zelin.html](http://nvo.ng.ru/reality/2012-03-16/1_zelin.html) (retrieved 15 February 2012). 核兵器の第一義性については、軍事安全保障に関するプーチンの選挙前論文も参照。Putin, Vladimir (2012) 'Byt silnymi: garantii natsionalnoi bezopasnosti dlia Rossii,' op. cit.
- <sup>16</sup> Levada Centre (2012) 'Za kakogo politika gotovy progolosovat rossiiane i chego ozhidaiut ot vyborov' [Which Politician Russians Are Ready to Vote for and What They Expect from the Elections], *Levada-Tsentr*, 2 February 2012, on the Internet: <http://www.levada.ru/02-02-2012/za-kakogo-politika-gotovy-progolosovat-rossiyane-i-chego-ozhidayut-ot-vyborov> (retrieved 22 February 2012).
- <sup>17</sup> Putin (2012) 'Rossiia i meniaushchiisia mir,' op. cit.
- <sup>18</sup> 一例として、あるテレビ番組で4時間半にわたって質問に答えたプーチンの回答を参照。'Stenogramm programma "Razgovor s Vladimirom Putinyem. Prodolzhenie"' [Transcript of the Programme 'Talking with Vladimir Putin. Continued'], *Pravitelstvo Rossiiskoi Federatsii*, 15 December 2011, on the Internet: <http://government.ru/docs/17409/> (retrieved 22 February 2012).
- <sup>19</sup> Belanovskii, Sergei and Dmitriev, Mikhail (2011) 'Politicheskii krizis v Rossii i vozmozhnye mekhanizmy ego razvitiia' [The Political Crisis in Russia and Possible Mechanisms for Its Development], *Fond "Tsentr strategicheskikh razrabotok" (CSR)*, November 2011, on the Internet: [http://www.csr.ru/index.php?option=com\\_content&view=article&id=307:2011-03-28-16-38-10&catid=52:2010-05-03-17-49-10&Itemid=219](http://www.csr.ru/index.php?option=com_content&view=article&id=307:2011-03-28-16-38-10&catid=52:2010-05-03-17-49-10&Itemid=219) (retrieved 21 May 2012) 及び Belanovskii, Sergei, Dmitriev, Mikhail, Misikhina, Svetlana and Omeltjuk, Tatiana (2011) 'Dvishushchie sily i perspektivy politicheskoi transformatsii Rossii' [The Moving Forces behind and the Future for Russia's Political Transformation], *Fond "Tsentr strategicheskikh razrabotok" (CSR)*, November 2011, on the Internet: [http://csr.ru/index.php?option=com\\_content&view=article&id=344%3A2011-12-01-11-40-29&catid=52%3A2010-05-03-17-49-10&Itemid=219&lang=ru](http://csr.ru/index.php?option=com_content&view=article&id=344%3A2011-12-01-11-40-29&catid=52%3A2010-05-03-17-49-10&Itemid=219&lang=ru) (retrieved 14 February 2012).
- <sup>20</sup> Tikhonova, N. E. and Mareeva, S. V. (2009) *Srednii klass: Teroiia i realnost* [The Middle Class: Theory and Reality] (Moscow, Alfa-M), p. 93. 中間層の判定には所得層を基準とするだけでなく、自己認識、社会資本、社会的・職業的地位も加味されている。ここで言及している中間層評価の方法論の詳細については、*ibid.*, pp. 75ff を参照。ロシアと欧米の中間層に関する社会学的諸説の概要については、*ibid.*, pp. 15–74 を参照。
- <sup>21</sup> Yefremenko, Dmitrii (2012) 'V ozhidanii shtormovykh poryvov' [Waiting for stormy upheavals], *Rossiia v globalnoi politike*, Vol. 10, No. 2, p. 11 (pp. 8–22).
- <sup>22</sup> 中間層の支配的な価値観の概要については、Belanovskii and Dmitriev (2011) 'Dvishushchie sily i perspektivy politicheskoi transformatsii Rossii,' esp. pp. 44ff を参照。
- <sup>23</sup> *Ibid.*, pp. 21ff.
- <sup>24</sup> Centre for Strategic Research (2012) *Obshchestvo i vlast v usloviakh politicheskogo krizisa* [Society and Power in Conditions of a Political Crisis], Report by experts of the CSR to the Committee for Civil Initiative, May 2012, available in connection with the publication of an interview with Mikhail Dmitriev, *Vedomosti*, 24 May 2012, on the Internet: [http://www.vedomosti.ru/opinion/news/1779345/ustalost\\_zrelost\\_konfrontaciya?full#cut](http://www.vedomosti.ru/opinion/news/1779345/ustalost_zrelost_konfrontaciya?full#cut) (retrieved 25 May 2012).